

# 海を眺めてくらす女川町のまちづくり

女川町の震災復興事業は、「海を眺めてくらすまち」をコンセプトに、周囲の豊かな自然と調和し100年先の人々にも選ばれる都市空間を目指した。町の骨格をなすレンガみちは、海への眺望軸でもあり、沿道建物と相まって町の新たな風景を創りだした。



歩行者プロムナード「レンガみち」とテナント型商店街「シーバルピア女川」

## 官民協働による復興まちづくり

人口減少、高齢化社会、商店街のシャッター街化。将来への課題が浮き彫りになる中、東日本大震災が発生した。町人口10,014人のうち827人が犠牲となり、町外への人口流失も相次いだ。町の存続を賭けて早期復興はもとより、将来にわたって選ばれるまちの実現が不可欠となった。

そんな危機感が募る中、被災1カ月後に設立された民間組織「女川町復興連絡協議会」は、町の新たな将来像「海を眺めてくらすまち」を描いた。2012年6月には「女川町まちづくり推進協議会まちづくりワーキンググループ」が発足。駅前エリアの活用方法の検討が開始された。更に2012年12月のワークショップで、「海を眺めてくらすまち」は、駅から海をつなぐ歩行者プロムナードとその周辺に商業施設を集約させる都市空間像として具体化した。

その後、町民が一丸となって描いた町の将来像を実現するために、2013年9月に「女川町復興まちづくりデザイン会議」が設立。町長、役場職員、工事関係者、都市デザイン専門家、町民が一堂に会し、まちのデザインから各施設の細部にわたるまでオープンに議論した。2014年度末までに、デザイン会議は計21回、デザイン会議の下部組織であるシンボル空間検討部会は計27回開催しており、あらゆるステークホルダーが会して集中的に議論することで、復興のスピードを落とさず質の向上を図ることが可能となった。

町の骨格が見え始めた頃、駅前シンボル空間では民間事業者により地区内の景観誘導を図る景観形成委員会が設立。独自のガイドラインに基づき、店舗再建時に各事業者と建物デザインについて協議を行い、自然と調和したまちなみを実現している。



レンガみちのにぎわい



被災直後の状況



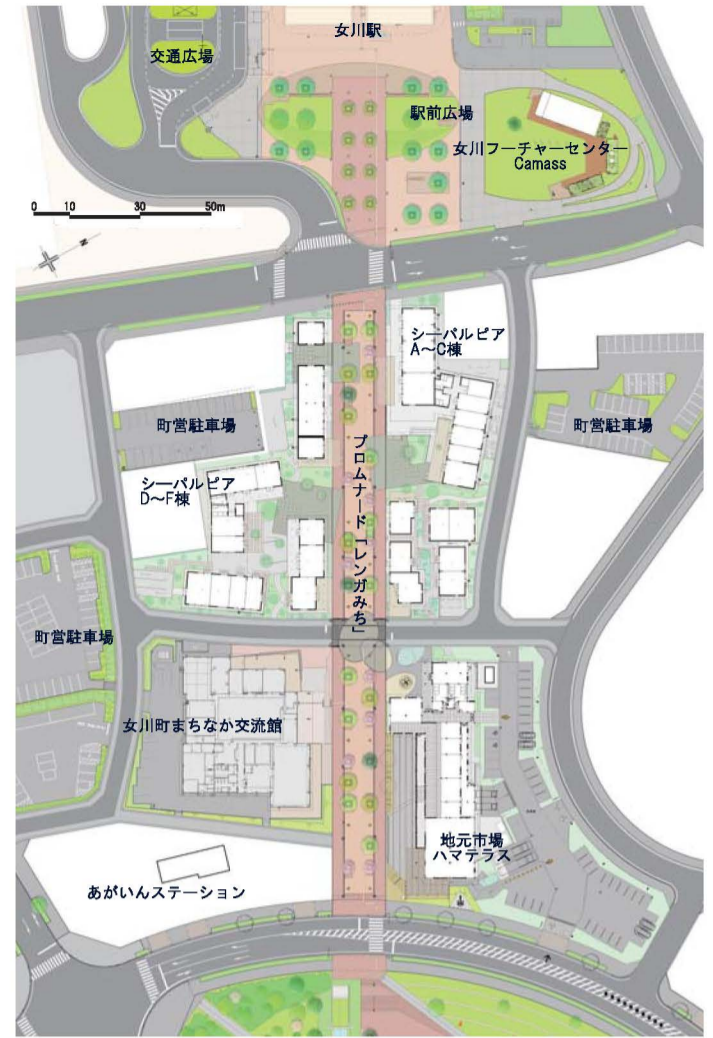
駅前広場を活用したさんま収穫祭



レンガみちを活用したファッションショー



女川駅上空から女川湾を望む



女川駅前シンボル空間の平面図

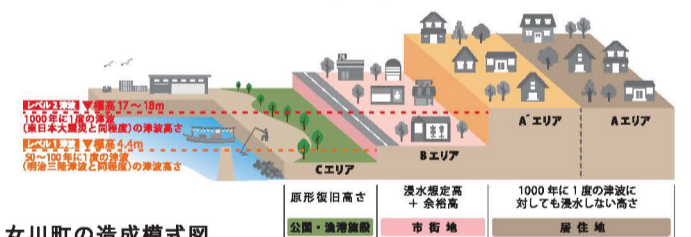
## 防災と生活を調和させた復興デザイン

女川町の復興事業において、居住地は1000年に1度の津波（東日本大震災と同程度）でも浸水しない高さ、駅や商業、工業の場は50～100年に1度の津波で浸水しない高さ、水産関連施設は原形復旧の高さで造成・整備している。一見すると防潮堤が見えないが、このように町全体を嵩上げすることにより津波に対する防災性と海への眺望を両立している。

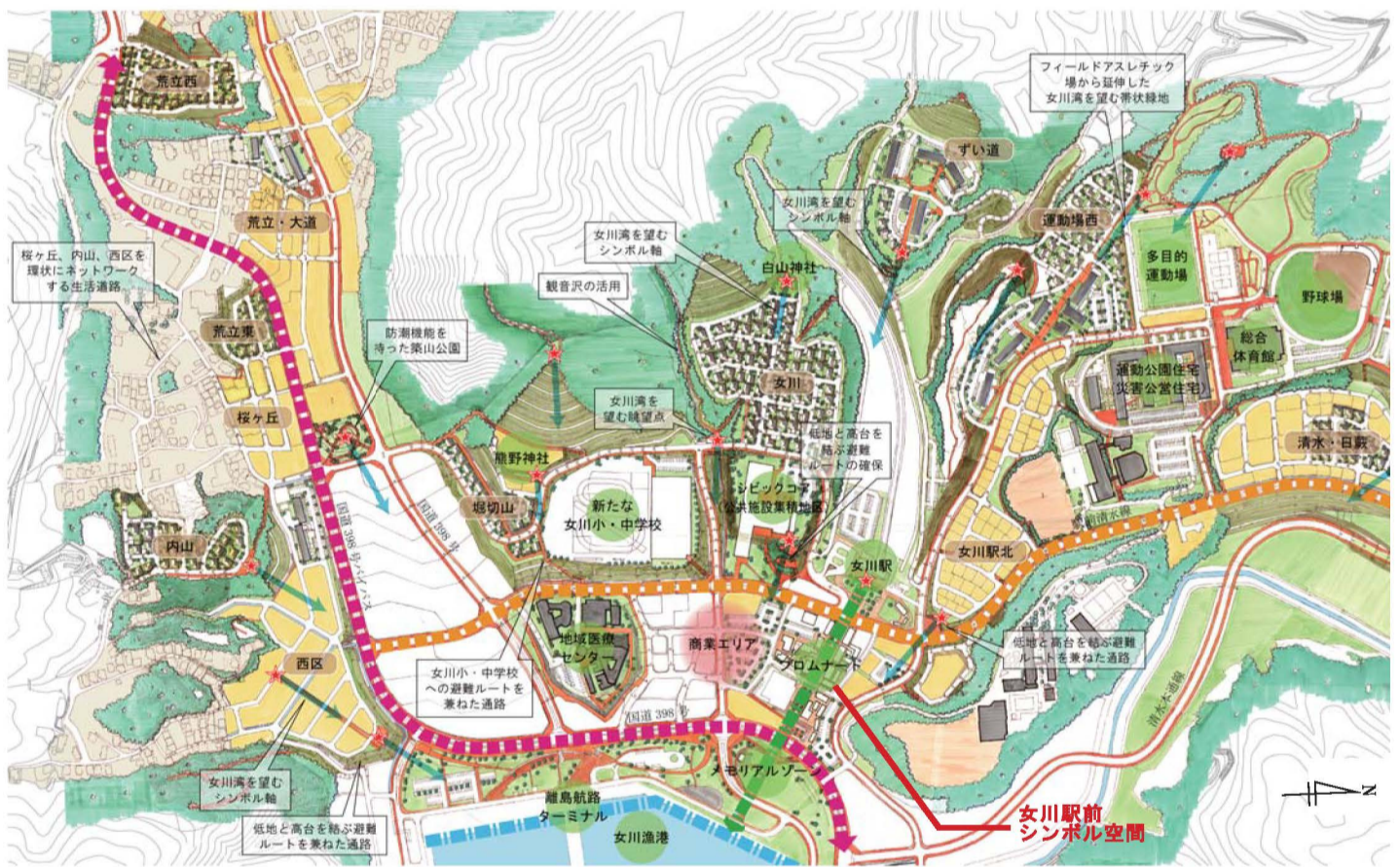
女川町では、まちの各所に海への眺望軸を設け道路や建物配置を綿密に調整することで、「海を眺めてくらすまち」を実現している。女川駅から海へ伸びるレンガみちは、海への眺望軸であり、町の骨格である。レンガみちの線形は、元旦の日の出の方向に向けてことで新たな出発の思いを込めるとともに、海を眺めながら商売する女川らしい風景の創出を目指した。



フィールドアスレチックからの眺望軸



女川町の造成模式図



女川町全体のグランドデザイン 出典：女川町まちづくりデザインのあらしみ第2版 女川町



女川駅前広場  
交通広場を駅舎側面に配置し、駅正面を人の空間として開放することで、人々の活動が集まる場となっている。



レンガみち  
様々な樹種の2列並木とレンガベンチにより、滞留しやすい空間を形成している。



自立再建店舗  
境界部の土地利用を調整することで、建物の間を抜ける小道を設け、地区の回遊性を高めている。

2018年度都市景観大賞  
都市空間部門 国土交通大臣賞

2018年アジア都市景観賞  
Asian Townscape Awards

GOOD DESIGN  
AWARD 2018

東日本大震災の被災直後から、弊社が継続して取り組んでいる女川町の復興まちづくりが、「2018年度都市景観大賞都市空間部門 国土交通大臣賞」「2018年アジア都市景観賞」「2018年グッドデザイン賞」を受賞いたしました。